

貝塚市議会議長

中山 敏数 様

平成 28 年 7 月 28 日

研修参加者 北尾 修
谷口 美保子
報告者 北尾 修

研 修 会 参 加 報 告 書

日時：平成 28 年 7 月 19 日（火）

研修先：大阪私学会館

研修内容： 地域公共交通セミナー

①自治体における公共交通政策総論 10:00～11:00

講師 土井 勉 特任教授（大阪大学コミュニケーションデザインセンター）

今回の講義の重要な点

- 1、総交通量減少の時代を迎えている。
- 2、地域公共交通のサービスとは何であるか。
- 3、公共交通の「赤字」は地域への「投資」である。

交通の意義と役割として絶対必要不可欠な本源的交通と色々な事由からの派生的交通がある。生活そのものの目的とつなげる距離の克服となる。現在、自動車を中心となっている。それは便利、快適、快樂等々の特性からである。しかし渋滞による損失も年間 12 兆円と言われている。便利な反面の損失も考えなければならない。公共交通を利用する人口は明らかに減少している。しかし、公共交通は一度無くなると再生は困難である。今こそ、地域にとって望ましい交通政策を実現するラストチャンスである。自動車があることの便利さだけでなく、もっと多くの人たちが「自由闊達に活動できるまち」の在り方が期待されている（コンパクト＋ネットワーク型都市構造）公共交通の果たす役割も大きなものがある「自由に行動することを支えるインフラ」として重要である。

公共交通の目的は、地域の人々の移動支援（モビリティの確保）地域公共交通をインフラと位置付けることが大切。赤字の補填が市民への投資となる。

②世界の都市交通政策フロントライナー 11:30～12:30

講師 松中 亮治 准教授（京都大学大学院工学研究科）

新たな発想に基づく都市交通政策メニューに自動車交通中心の都市交通政策から

の転換が必要であると考えることが必要である。例として

- ◎道路空間リアロケーション／歩行者空間整備
- ◎トランジットモール
- ◎交通静穏化政策（ゾーン 30）
- ◎ロードプライシング
- ◎LRT, BRT, Tram-Train
- ◎P+R／駐車場政策
- ◎コミュニティサイクル/自転車政策

等々、出来ることは全てしていかなければいけない。

③公共交通政策の財政と負担 13:30～14:30

講師 正司 健一 教授（神戸大学大学院経営学研究科）

国交省の 2012 年度の調査では地方鉄道 91 社のうち 8 割近い 69 社が経常赤字に陥っている。人口減に伴う輸送人員の長期低落傾向に加え、路線や車両などを維持更新する負担が重いためである。こうしたインフラに関する費用は営業費用の 4 割を占める。日本ではこれまで行政の補助があるものの、鉄道は民間事業者が全てを独立採算で賄うのが原則で、これに対し欧州は公共交通を共有財産と見なし、道路と同じように行政が鉄道のインフラを負担するのが一般的であるようだ。

公共交通は市民生活にとって必要不可欠であり、赤字であっても必要なもの。公共性を優先する一方、採算性を重視することも必要で、重要なことは地域にとって大切で必要なサービスを効率的に行えるよう事業者は努力すべきである。「地域公共交通の活性化及び再生の促進に関する基本方針」では、ともすれば民間事業者の事業運営に任せきりであった従来の枠組みから脱却し、地域の総合行政を担う地方公共団体が先頭に立って、公共交通事業者、住民・利用者、学識経験者をはじめとする地域の関係者が知恵を出し合い、合意の下で、持続可能な地域公共交通網を構想し、その実現に向けて地域公共交通の活性化及び再生を図ることが重要である。

④公共交通政策の実践 14:30～15:30

講師 中川 大 教授（京都大学大学院工学研究科）

これからの交通政策で利用者が増えるか減るかは知恵とやる気の問題。鉄道・バスはサービス産業であり、サービス産業の需要は「サービスの質」で決まる。利用者が減り続けるのはサービス業の基本原則を理解していないから

で、「良いサービスを提供して、たくさんの人に乗ってもらって、採算を高める」という発想が必要。

自治体における公共交通政策としては、市民・利用者にとって必要な公共交通を実現するために、どのような政策を行うべきかを議論する必要がある。

事業者を支援（赤字補てん）するだけでなく、自らの責任で行うことが必要。

利用者の視点から知恵と工夫と努力を最大限に発揮して適切な展望を描き、適切な政策を実行すれば必ず改善の方向に向かう。

<感想>

公共交通の今後を考える上で大変参考になったセミナーである。

特に、中川教授は様々な地域で実際に再生してきた体験をもとにした話であったので、とても説得力があった。

貝塚市においても今後の公共交通の再生へ向けて、知恵と工夫を発揮していきたい。